

2025 年度 卒業生アンケート結果 報告書

本報告書は、看護学科卒業後 1 年目（2021 年度入学・2024 年度卒・30 期生）および 2 年目（2020 年度入学・2023 年度卒・29 期生）の卒業生を対象として実施した 2025 年度卒業生アンケートの結果を取りまとめ、本学科教育の成果、卒業後における継続的な効果および課題を明らかにすることを目的とするものである。本調査では、本学のディプロマ・ポリシー（DP1～8）に基づく能力の活用状況に加え、学修満足度や教育内容に対する評価を把握し、これまでの調査結果との比較を通して、本学科教育の継続的改善に向けた示唆を得ることを目指した。

I. 調査内容

A. アンケート実施時期

2025 年 10 月～11 月 28 日

B. 対象

看護学科卒業後 1 年目 60 名、および 2 年目 55 名の計 115 名を対象とした。卒業後 2 年目の対象者（29 期生）は、2020 年の入学時から演習・実習・学生生活全般にわたり、新型コロナウイルス感染拡大による影響を大きく受けた世代であった。

C. 方法

1. 調査方法

Google フォームを用いた無記名 Web アンケートを実施した。依頼方法は、看護学科キャリアサポートステーションおよび学年 LINE にて調査依頼とアンケート URL を配信した。

2. 調査項目

- 1) 属性：卒業年度、就業年数、現在の職種、雇用形態、勤務施設の種類、卒業後の進学の有無、進学先名、進学希望の有無
- 2) 「看護学科で涵養した DP1～8 の能力を就職先や進学先で活かすことができているか」：4 件法（1. まったく思わない、2. あまりそう思わない、3. まあそう思う、4. そう思う）、各 DP の回答理由：自由記載
- 3) 「看護学科で学んでよかったか」：4 件法（1. まったく思わない、2. あまりそう思わない、3. まあそう思う、4. そう思う）、回答理由：自由記載
- 4) 看護学科教育において「継続すべきこと」、「改善すべきこと」：自由記載

II. 結果

A. 回答者数と回答率

年度別回答者数および回答率を表 1 に示す。2023 年度および 2024 年度と比較して、2025 年度では全体の回答率が上昇した。2025 年度の卒後 2 年目における回答率は、2024 年度と比べて 2.6%低下していたが、同一対象者が卒後 1 年目であった 2024 年度の回答率(16.4%)と比較すると、大きく上昇していた。

表 1. 年度別回答者数および回答率

B. 回答者の属性

回答者の属性を表 2 に示す。両期ともに看護師が大多数を占め、29 期生では 90.9%、30 期生では 85.7% が看護師として就業していた。その他、保健師、助産学専攻学生、大学院生などが少数含まれていた。

雇用形態はいずれの期においても常勤が約 9 割を占めており、所属施設の種類としては、大学病院が最も多く、次いで総合病院が続いていた。

表 2. 回答者の属性

C. 看護学科で涵養した DP1～8 の能力を就職先や進学先で活かすことができているか

1. 4 件法（1.まったく思わない、2.あまりそう思わない、3.まあそう思う、4.そう思う）による結果

1) 各能力領域に対する自己評価の分布

DP1～DP8 の各能力領域に対する自己評価の分布を、卒後 2 年目（29 期生）および卒後 1 年目（30 期生）で比較した（表 3、図 1）。卒後 1 年目および卒後 2 年目のいずれにおいても、DP1（主体的学習能力）から DP7（メンバー・リーダーシップ）までの各 DP では、「そう思う」または「まあそう思う」と回答した肯定的評価の割合が高かった。特に、DP2（課題解決能力）、DP3（パートナーシップ）、DP5（倫理的態度）、DP6（教養・品格）、DP7（メンバー・リーダーシップ）では、両群ともに肯定的評価が大半を占めていた。

一方で、DP4（地域医療連携能力）では、他の能力領域と比較して「そう思う」の割合が低く、「まあそう思う」が中心となる分布を示していた。

DP8（国際的視野）については、他の能力領域とは異なる傾向が認められた。卒後 2 年目（29 期生）では、「あまり思わない」および「まったく思わない」と回答した割合が 86.4%を占め、卒後 1 年目（30 期生）においても 57.2%と過半数を占めていたが、卒後 2 年目と比較すると肯定的評価の割合は高かった。

表 3. DP1～8 の能力が就職先や進学先で活かされているか（29 期生・30 期生）

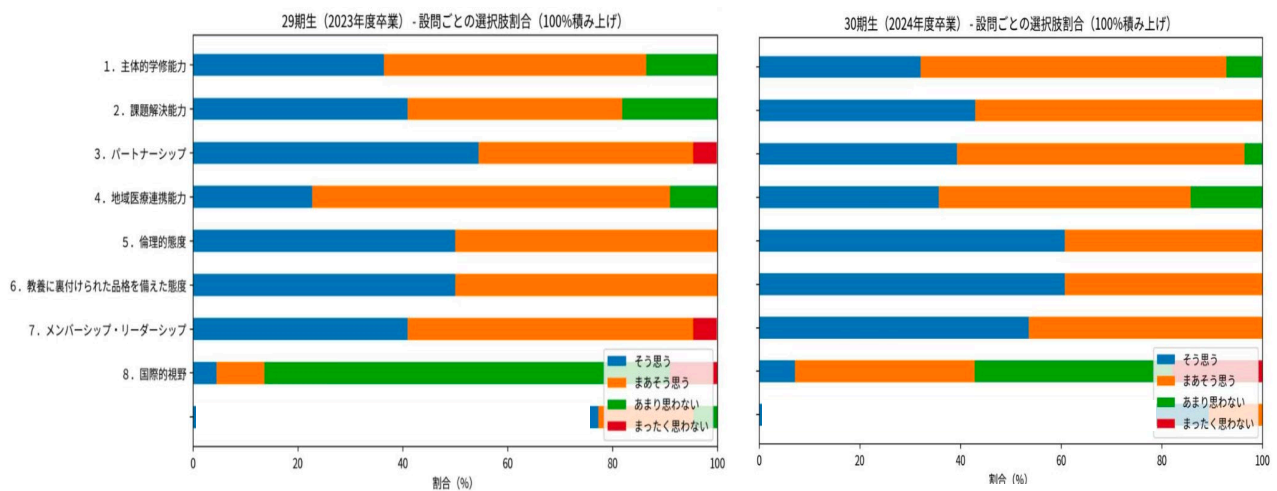


図 1. DP1～8 の能力が就職先や進学先で活かされているか選択割合（100%積み上げ） / 卒 2・29 期生（左）と卒 1・30 期生（右）

2) 卒後 2 年目・29 期生の回答を 2024 年度と比較した結果

DP1～DP8 の各能力が就職先や進学先で活かされているかについて、29 期生の卒後 2 年目（2025 年度）と卒後 1 年目（2024 年度）の自己評価を比較した（表 4、図 2）。

DP1（主体的学習能力）、DP2（課題解決能力）、DP5（倫理的態度）、DP6（教養・品格）、DP7（メンバー・リーダーシップ）では、2025 年度において「そう思う」と回答した割合が 2024 年度と比較して増加しており、能力の活用に対する肯定的評価が高まっていた。

DP3（パートナーシップ）では、2024 年度と 2025 年度で「そう思う」「まあそう思う」の割合に大きな変化はみられなかった。

DP4（地域医療連携能力）では、2025 年度において「まあそう思う」が中心となる分布を示しつつ、「そう思う」の割合は増加したものの他の DP と比較すると依然として低かった。

一方、DP8（国際的視野）では、2024 年度では「まあそう思う」と回答した割合が一定数みられたのに対し、2025 年度では「あまり思わない」および「まったく思わない」と回答した割合が増加しており、卒後 2 年目において能力の活用実感が低下していた。

表 4. DP1～8 の能力が就職先や進学先で活かされているか (29 期生 2024 年度・2025 年度)

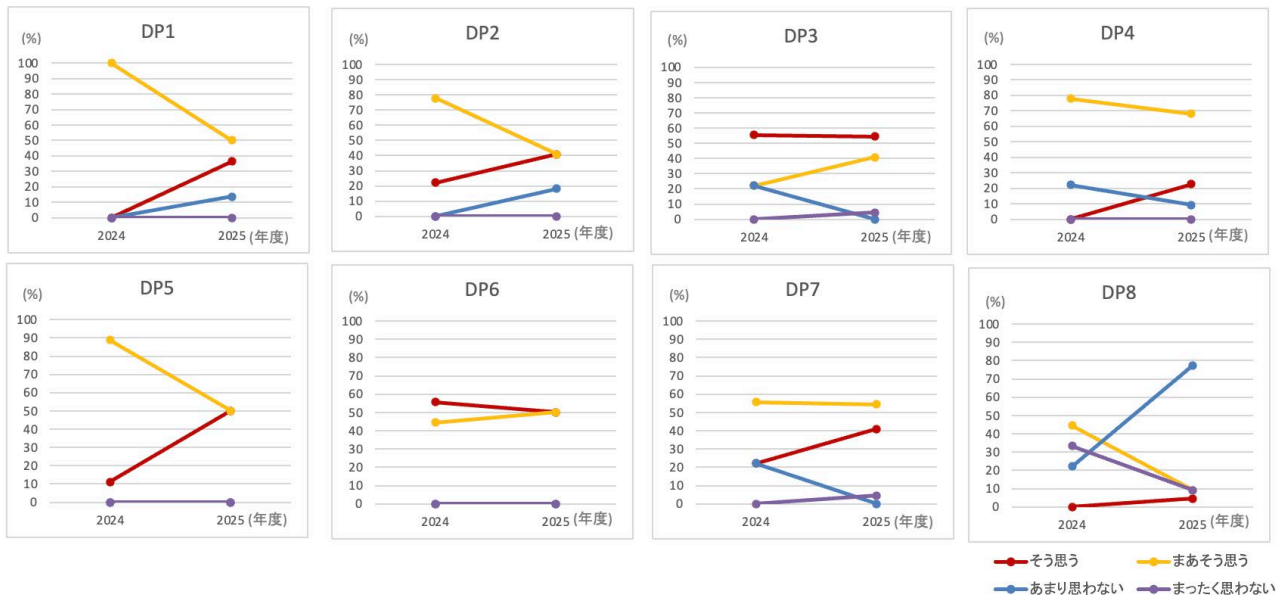


図 2. DP1～8 の能力が就職先や進学先で活かされているか (29 期生 2024 年度との比較)

2. 卒業生の DP ごとの自由記載

DP1～8 の能力が就職先や進学先でどのように活かされているか、自由記載欄の内容を表 5 にまとめた。DP1・DP2 では、不明点を自ら学習し課題解決に取り組む姿勢が、就職後も一定程度維持されていることが示された。DP3 では、協働や信頼関係の重要性は理解されている一方、臨床現場での多様な人間関係に難しさを感じる例もみられた。DP4 は、退院支援など一部で活用されているが、病棟や役割によって実践機会が限られている。DP5・DP6 では、倫理的配慮や礼節を意識しているものの、忙しさによる制約も認識されている。DP7 は、報告・連絡・相談の重要性は理解されているが、リーダー経験は少ない。DP8 は、外国人患者対応の経験はあるものの、英語力や実践機会の不足により十分に活かしていない状況がみられた。

表 5. DP1~8 の自由記載

回答	回答理由	要約
DP1 主体的学修能力		
そう思う	不明点を自己学習で解決している (29 期)	卒業後も、不明点を自ら調べて解決する姿勢や自己研鑽を継続しており、主体的に学びながら実践している。学生時代に培った学び続ける意識は維持されている。
	今の職場に看護師が私一人であるため初めてのことも学びながら行っているため。(29 期)	
まあそう思う	仕事をしながらの勉強はできないこともあるが、勉強していく姿勢は保っていると思うため。(29 期)	
	働いてからは自分から何かを学びに行かなければ仕事がやっ ていけないため、学生の時に得た力は発揮していると思う (30 期)	
	自己研鑽で勉強しているから。(30 期)	
	分からないことをそのままにせず自分でまずは調べる習慣が着いていたから。(30 期)	
あまりそう思わない	よくわからない (29 期)	
DP2 課題解決能力		
そう思う	自分で課題を見つけてそれを解決しようとしている (29 期)	自ら課題を見だし解決しようとする姿勢を保ち、学んだ内容を実践に活かしている。自己研鑽を続けながら、自分の考えをもって業務に取り組んでいる。
	自分自身で勉強していくことは大変だが、看護において病態の見方など実習を通して教えてもらい、フィジカルアセスメントと病気を繋げていく方法などは活かしているため。(29 期)	
	基礎的な研究法の知識が特に活かされたと感じる (30 期)	
	自分の考えを持って働くことを大切にしているから。(30 期)	
まあそう思う	DP1 と同様 (自己研鑽で勉強しているから。)(30 期)	
DP3 パートナーシップ		
そう思う	同期やチームメンバーと協働する大切さを知っているから。患者さんとも信頼関係を築くことを大切にしているから。(30 期)	協働の重要性を理解し、患者との信頼関係の構築を意識している。治療上の制限により困難な場面もあるが、これまでに培ったパートナーシップが実践に活かされている。
まあそう思う	意識できている。たまに治療上の制限で患者の理解を得られず信頼関係の構築は難しいこともある。(29 期)	
	多くの人と一緒に働き、患者さんに接しており、この環境で働いているのは培ってきたパートナーシップが活かされていると思う。(30 期)	
あまり思わない	大学では優秀な学生が多かったが、臨床に出ると大学と同じ	多様な背景をもつ同僚

	環境とはいかない。そういった同僚とも協働しなければなら ないため苦労している。(30期)	と協働する必要がある 難しさを感じている。
DP4 地域医療連携能力		
そう思う	退院支援で、大学時代に学んだ知識を用いて、調整等に活か しているから。(30期)	大学で学んだ知識を活 用して実践している一 方、HCU 病棟では地域 連携の対象となる患者 が限られている。
まあそう思う	HCU 病棟では地域連携の段階の手前の人が多いため。(29 期)	
あまり思わない	実際働くと、病棟内だけの関わりになることが多く、自ら連 携に携わっているという実感はあまりない。(30期)	病棟内での業務が中心 となり、自ら連携に関 与している実感が無い
DP5 倫理的態度		
そう思う	だんだんと感覚が鈍ってくる自覚があるため、よく考えるよ うにしているため。(29期)	倫理的感覚の低下を自 覚しながらも意識的に 考える姿勢を保ってい る。一方で、忙しさの 中で優先できない場面 もある。
	看護師と患者さんという関係性である前に、人と人としての 関わりを大切にしているから。(30期)	
まあそう思う	忙しい時には最優先となっていない気がする(29期)	
	考えさせられる倫理的場面に立ち会うことが多いため。(30 期)	
DP6 教養に裏付けられた品格		
そう思う	できていると思う(29期)	基本的な礼節を大切に し、看護実践の中でも その姿勢を保ってい る。
	挨拶など基本的な礼節を大切にしています。(30期)	
まあそう思う	看護していく中でこの気持ちを持ち続けられているため。 (30期)	
DP7 メンバーシップ・リーダーシップ		
そう思う	メンバーシップ・リーダーシップを科目として位置付けて深 く学べた点が非常に良かったと感じる(30期)	学んだ経験を活かし、 報告・連絡・相談の重 要性を理解し実践しよ うとしている。一方 で、リーダーとなる機 会は少なく、自身の業 務に精一杯になりなが らも周囲を意識する段 階にある。
	報告、連絡、相談の大切さを知っており、実践できるよう心 掛けているから。(30期)	
まあそう思う	リーダーとなる機会は少ない (29期)	
	まだ自分のことで精一杯になることも多いが周りを見れるよ うに意識している。(29期)	
	DP6と同様(看護していく中でこの気持ちを持ち続けられて いるため。)(30期)	
DP8 国際的視野		
そう思う	外国人患者も多いため(29期)	外国人患者への対応を 経験し、英語を用いた コミュニケーションを
	海外の患者さんが来た時、英語での対応を実践できた。(30 期)	

		実践している。
あまり思わない	あまり実践の場がない (29 期)	外国人患者対応の機会が少ない、またはコミュニケーションを取ろうとしていない。
まったく思わない	外国の方が入院することはあるが、英語力ないためいかせていない。文化や宗教を理解し対応するように努めてはいる。(30 期)	

D. 看護学科で学んでよかったか

図 3 は、29 期生および 30 期生の、設問「看護学科で学んでよかったか」に対する回答分布を示したものである。29 期生では、「そう思う」「まあそう思う」と回答した者が 21 名 (95.5%) と最も多く、また、30 期生においても、「そう思う」「まあそう思う」と回答した者が 28 名 (100%) と 9 割以上を占めており、「まったく思わない」と回答した者はいなかった。

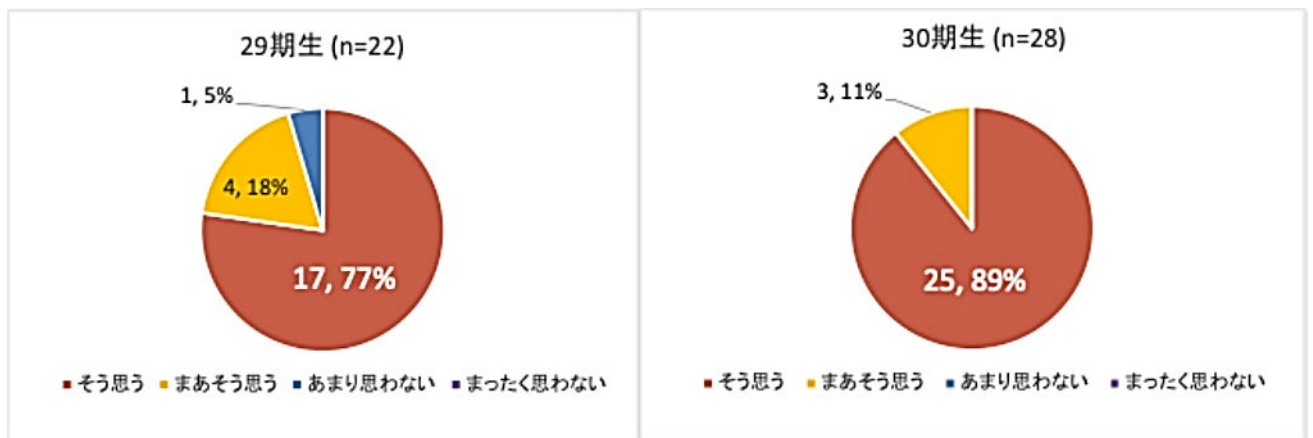


図 3. 看護学科で学んでよかったか (4 件法)

E. 看護学科での学習満足度

看護学科での学習満足度について、自由記載欄の内容を表 6 にまとめた。

看護実践に限らず、社会生活を送る上での力や知識を身につけられたこと、また、学習内容が実務に活かされている実感や、実習経験による就職後のギャップの少なさ、卒業後も続く同窓生や教員とのつながりが支えになっているという回答が得られた。

表 6. 看護学科で学んでよかったか (自由記載)

回答	回答理由
そう思う	今後たとえ看護師を辞めたとしても、社会で生き抜く力や健康に過ごすために必要な知識などを習得することができたと思うから。(29 期)
	たくさんのことを学んだため。(29 期)
	学んだことが活かされていると実感することもあるし、実習が大変だった分働いてからのギャップが少ないと感じる。(30 期)
	卒業後も、病院内で卒業生に出会ったり、先生と顔を合わせる機会があり、力になっています。(30 期)

F. 看護学科教育で継続すべきこと

看護学科教育で継続すべきことについて、自由記載欄の内容を表7にまとめた。

表7. 看護学科教育で継続すべきこと（自由記載）

項目	回答内容
学習・教育支援	実習のときなど、 関連図 をよく教えてもらったことが役に立っていると感じるため継続してほしい。（29期）
	卒前トレーニング はやる意味があったと感じている。（30期）
慈恵の特色ある教育内容・校風	メンバーシップ・リーダーシップ論 は慈恵の看護教育において特色あるもので、今後も継続してほしい。
	災害看護論 は選択科目であったが、近年は特に重要な内容だと思われる。（30期）
	医学科との 共修科目 （30期）
実践を具体的にイメージできる学び	少人数 で先生方も親身になって指導してくれてすごく学びやすい環境でした。人を診ること、慈しみのある、入らないと分からない素敵な校風だと思います。これからも続いて欲しいなど切に願います。（30期）
	居宅介護支援や老健などの 在宅医療 について。 退院支援のシャドーの実習 。（30期）
	卒業後の先輩たちや、当事者の方の話など、 実際にイメージできるような授業 は今でも印象に残っており、為になったと感じています。（30期）

G. 看護学科教育で改善すべきこと

看護学科教育で改善すべきことについて、自由記載欄の内容を表8にまとめた。

表8. 看護学科で改善すべきこと（自由記載）

項目	回答内容
看護技術・演習	看護技術 は働いてからもできるが、ちょっとした工夫なども看護になるため、褥瘡予防や呼吸器など身体症状ある方の安楽な体位、清拭、陰洗などなど学内実習や演習は 根拠 を考えながら、 何度かじっくりやれる機会 があるといいのかなと思う。（29期）
	CPRの練習はしたが、 実際に働いてからやる場面を想定して練習 した方が臨床で活かせると感じた。例えば病棟の廊下で意識を失い倒れた患者さん、応援を呼びAEDを依頼し、廊下でCPRを始めるなど。（30期）
授業内容・構成	医学科対象にしたような 難しい解剖生理学や疾病の授業 、パワーポイントが100枚くらい添付されるだけの授業。（30期）
	国試のテキストで薬剤について勉強し知らないことが多いと実感したため、授業内で 国試によく出るものを低学年から触れてると頭に残りそう だと感じた。（30期）
	卒業論文 （30期）
実習内容・体制	実習における 複数人受け持ち や 夜勤実習 を必須にする（30期）
運営面	授業の予定 などを、早めに分かるように調整した方が良いと思います。（30期）

III. 評価と改善点

A. 評価

1. 回答率の推移

2025 年度の卒業生アンケートでは、2023 年度および 2024 年度と比較して全体の回答率が上昇しており、特に卒後 2 年目（29 期生）においては、同一対象者が卒後 1 年目であった 2024 年度と比較して大きく回答率が向上していた。このことは、卒業後一定期間が経過し、臨床現場での経験が蓄積された段階において、自身の学部教育を振り返り、評価しようとする意識が高まった可能性を示唆している。一方で、2025 年度の卒後 2 年目の回答率は 2024 年度と比較するとわずかに低下しており、勤務状況や業務多忙化といった要因が影響している可能性も考えられる。これらを踏まえると、本調査結果は、一定の代表性を確保しつつも、臨床経験や就業環境の違いが回答行動に影響することを考慮して解釈する必要がある。

2. 回答者の特徴

本調査は、卒業後 1～2 年目の卒業生を対象としたものである。その多くが看護師として常勤で就業しており、特に大学病院に勤務する者が大半を占めていた。また、29 期生は全員が卒業後 1 年以上の臨床経験を有していた。したがって、本調査結果は、卒業後早期の臨床現場における実践経験に基づき、本学科での学修を振り返った評価を反映したものである。

卒業後の進学者は少数にとどまる一方で、未進学者の中にも一定数の進学希望者が認められた。これは、卒業後の臨床経験を通して、自己のキャリア形成や専門性の深化について再考する卒業生が一定数存在することが考えられる。今後は、卒前または卒後早期から、中長期的なキャリア形成を見据えた学修支援や情報提供の在り方についても検討していく余地がある。

3. DP1～DP7 に対する評価の特徴

DP1（主体的学修能力）から DP7（メンバーシップ・リーダーシップ）においては、卒後 1 年目・2 年目のいずれにおいても「そう思う」「まあそう思う」とする肯定的評価が高く、過年度の調査結果と同様の傾向が確認された。特に、DP2（課題解決能力）、DP5（倫理的態度）、DP6（教養・品格）、DP7（メンバーシップ・リーダーシップ）は、卒後 2 年目において「そう思う」と回答した割合が前年より増加しており、臨床経験を通して学生時代に涵養された能力の有効性を実感するようになっていると考えられる。

自由記載においても、不明点を自ら調べ学習する姿勢や、報告・連絡・相談を重視する行動、倫理的感覚を意識的に保とうとする姿勢が示されており、本学科教育が卒後の思考様式や行動規範として定着しており、教育効果の持続性が示唆された。

4. DP4（地域医療連携能力）に対する評価の特徴

DP4（地域医療連携能力）は、他の能力領域と比較して「そう思う」の割合が低く、「まあそう思う」を中心とした分布を示していた。この傾向は 2022 年度以降の調査においても一貫して認められており、急性期病棟勤務や配属部署の特性により、地域連携や退院支援に主体的に関与する機会が限られている卒業生が多いことが影響していると考えられる。

一方で、自由記載では、退院支援の場面で学生時代に学んだ知識を活用しているとの記述もみられ、能力が涵養されていないのではなく、「実践機会の制約」が自己評価に反映されている可能性が示唆された。

5. DP8（国際的視野）に対する評価の特徴

DP8（国際的視野）については、卒後1年目・2年目ともに否定的評価が多く、特に卒後2年目では前年よりも「活かしていない」とする回答が増加していた。自由記載からは、外国人患者と接する機会はあるものの、英語力や実践経験の不足により十分に活かしていないという認識が示されている。

本調査の対象となった卒業生は、『2019年度カリキュラム』において、英国キングス・カレッジ、シンガポール大学、国立台湾大学等との交換留学制度を設けるなど、国際的視野を強化した教育を受けていた学生である。しかしこれまでの調査結果においても、DP8は勤務環境や社会状況（新型コロナウイルス感染拡大による国際交流機会の制限等）の影響を受けやすい能力であることが指摘されてきた。

2025年度の結果は、国際的視野に関する能力評価が、学部教育における学修経験のみならず、卒後の実践機会や個人の関心、置かれている臨床環境に強く依存する特性を持つことを改めて示すものと考えられる。

6. 継続すべき教育内容と改善点

「継続すべきこと」として挙げられた内容は、関連図指導、卒前トレーニング、少人数教育、メンバーシップ・リーダーシップ論、医学科との共修、実践を具体的にイメージできる授業などであり、過年度の調査で高く評価されてきた本学科教育の強みと一致している。

一方、「改善すべきこと」では、看護技術演習やCPRをより臨床場面に即して実施すること、授業内容や課題量の調整、実習体制や運営面への配慮などが、具体的な形で示された。これらは、卒業後に臨床現場での経験を積む中で、自身の学修を振り返った結果として表出したものであり、日々の業務体験に基づく、より現実的な改善要望へと反映されたものであると考えられる。

B. 総合的評価

以上より、2025年度の卒業生アンケート結果は、本学科の教育プログラムが卒業後も有効に機能していることを再確認するものであった。加えて、「看護学科で学んでよかったか」という設問に対して、卒後1年目・2年目ともに肯定的な回答が大多数を占めており、本学科での学修が、看護実践のみならず社会生活全般においても有用であると卒業生自身が評価していることが示された。

一方、改善点として、実際の臨床場面を想定した演習・実習の工夫や、国際的視野に関する教育の位置づけを再検討する必要性が示唆された。また、DP8「国際的視野」については、令和6年度看護学教育モデルコア・カリキュラムで示される多様性・公平性・包摂性の視点を踏まえ、DP8の名称およびブルーブリックの内容について、より広い概念を包含する形での修正案が提案されている。これは、DP8を国際経験中心の能力から、臨床実践における多様性理解と包摂的態度を涵養する能力として再構築する方向性を示すものである。「グローバル・ダイバーシティ」への名称変更により、外国人対応や海外経験に限定されない、日常の臨床実践における多様な対象理解や公正な看護実践を評価可能とする枠組みへと発展させることが期待される。

以上